

# 京都芸能プロジェクト 歌舞伎情報のデジタルアーカイブ

赤間 亮・倉橋正恵・金子貴昭・松岡 亮・齊藤千恵

**概要** 本プロジェクトは、他の関連研究所や資料館と共同して、歌舞伎資料のデータベースの開発を行なっている。研究者や他の研究向けに、これらのデータベースを統合する機能を準備している。今年、私たちは、「江戸歌舞伎年表」と「歌舞伎人名データベース」を正式に公開し始めた。この歌舞伎総合アーカイブは、たとえば、歌舞伎のビデオを見るときに補助教材として期待されている。私たちはまた、京都の歌舞伎デジタルアーカイブについても、COEの期間中に完成させたいと思っている。

Kyoto Performing Art Project:

## Digital Archiving on the information of Kabuki performance

Ryo Akama, Masae Kurahashi, Takaaki Kaneko, Ryo Matsuoka, Chie Saito

**Abstract** We have made research collaborations with associated institutes and organizations. Some institutes are making database about Kabuki. For othre institute or researcher, we have to prepare the platform to synthesize the Kabuki databases. We have opened twe database officially as the entrance of comprehensive Kabuki archives this school yeare. One is chronology of Kabuki, and the other is biographical database for Kabuki actor and musician. It is expected as one of the supplement for waching film of Kabuki. We also start making database for the history of Kyoto Kabuki, and we will finish it by the end of COE.

### 1, はじめに

京都は、日本芸能の源泉である。日本芸能を代表する二つの大きな芸能である能楽・歌舞伎の歴史を辿るとき、京都を欠落させるわけにはいかない。研究の視点は京都にあるとしても、この二つの芸能を現代においてどのように位置づけるかを考えるとき、「日本を代表する」という視点も必須の課題となってくる。

本プロジェクトでは、片山家能楽・京舞保存財団との共同研究を推進している。前年度から引き続き、片山家の学術的・教育的なイベントのアシスト活動を行ない、能装束展、絵本語り公演等のサポートを行なってきた。また、能楽舞台映像と京舞映像をデジタル化しており、その映像の目録化と閲覧システムの開発を開始した。

今年度は特にオープン・リサーチ・センタープロ

ジェクトやCOEサブプロジェクトの他のプロジェクトとの連携 [1] を図り、その仲介役としての役割を担ってきたが、それだけでなく、大英博物館で 2005 年 6 月から開催される大阪歌舞伎展において映像出品されるビデオ作品の制作を行なっている。海外の博物館で行なわれる展覧会ということであり、日本文化への基本的知識のない鑑賞者をどのように展示の場に導入するのかという課題があって、CGを使った新しい実験映像を提供することで新鑑賞手法を創り出そうとしている。そこで展示される歴史的資料（文献資料）のほとんどは、現在の歌舞伎舞台と時間の壁を乗り越えて繋がっている。古典芸能としての歌舞伎は、現代演劇としても生き続けているという事実を強いインパクトを与えつつ伝達できればよいと考えている。

さて、本報告では、特に、歌舞伎の研究、教育用デジタルアーカイブについて、現状を報告し、本ブ

プロジェクトの役割と目指すものを紹介していく。

## 2. 他機関との連携による歌舞伎総合アーカイブの構築

歌舞伎に関するデジタルアーカイブとしては、現在、早稲田大学演劇博物館が幾つかの関連データベースを公開しているほか、資料のデジタル化を進めている。ここでは、かつて赤間が演劇博物館所属当時にデジタル化部門を担当しており、現在でもその方向性が継続されている。本研究においては、その於ける大規模な資料アーカイブの経験を生かされて、より発展的な方向を目指していることになる。また、松竹大谷図書館は、演劇専門図書館の必要性から、いわゆる図書館業務と並行して、松竹が主催する歌舞伎公演を中心とした興行情報の整理をカードによって行っていた。現在は、PCを使ったデータベースへと転じて遡及作業もスタートさせた。松竹大谷図書館とアート・リサーチセンターは学術協定を結んでおり、その下、演劇情報基盤データベースを赤間が設計した。また、データ遡及については、システム・データ構築の両面において本プロジェクトが共同作業を担っている。

さらには、役者評判記研究会が江戸時代を通じて毎年数種類出版された役者評判記の本文ならびにデータベースを作成しており、本プロジェクトのメンバーが参加し、デジタル技術と発信の部分を当該プロジェクトが担当している。

こうした中で、本プロジェクトは、人文系研究機関としての他組織が行っていない情報発信部分を担い、それらを網の目のように連携させ、歌舞伎の総合的なアーカイブをWEB上に完成させることを目的としている。

## 3. 資料アーカイブ

歌舞伎は、江戸期という出版文化の時代に並行して誕生・発展し、当時の最大のマスメディアとして機能していた。そのため、長い歴史の中で、消滅し

てしまったものも多いが、それでもなお残存する資料が膨大にあり、まずはその資料の山を越えることが研究者にとって必要となる。そのため、昭和の研究史をひもとくと、共同研究による資料整理が歌舞伎研究の学会の中心課題であった時期もあり、それに対し、個別の研究を停滞させたとして、批判的な発言を行なう研究者もいる。

歌舞伎研究の世界では、とくに資料が「膨大」であり、それを「共有」させるということが重要なキーワードとなっており、そのためにWEBを利用したデジタルアーカイブが切実な研究課題となっているのである。

歌舞伎資料の内、主なものとして次のサーカイブ構築が必要となっている。

### ・役者絵アーカイブ

浮世絵の1分野ながらその半数以上を占めるものが歌舞伎の役者を描いた浮世絵である。

現在、私たちのプロジェクト活動の中で、最も知られたものが、この浮世絵アーカイブである。

fig.1 検索画面



fig.2 検索結果サムネイル表示



fig.1-3 に示したような検索手順で所望の作品にピンポイントでたどり着くことができる。しかも、このデータベースは、許可されたデータ制作者チームで

あればネット上でデータ編集画面にアクセスが可能となっており、検索作業をしながら、気づいた時点でデータの追加や更新が行える成長型データベースとして、世界中に協力者を得て日々精度を増している。



fig.3 詳細情報表示

・芝居番付アーカイブ

番付は、観劇用のプログラム・パンフレット・ポスターなどに当るもので、興行記録の根本資料である。現在、一般的には『歌舞伎年表』や『歌舞伎年代記』（正・続・続々）という、誤植もまま見受けられ、完全な情報とはなっていない資料を基に歌舞伎資料の考証をしたり、研究をしている場合が多い。特に、海外の研究者にとっては、ほぼ、これらの資料を使うところまでが限界である。しかし、こうした配役表である番付の原本にアクセスできることで、氷解する研究上の問題は数多くあり、それを目指して開発、進められてきたのが、芝居番付アーカイブである。

fig.4 検索結果画面

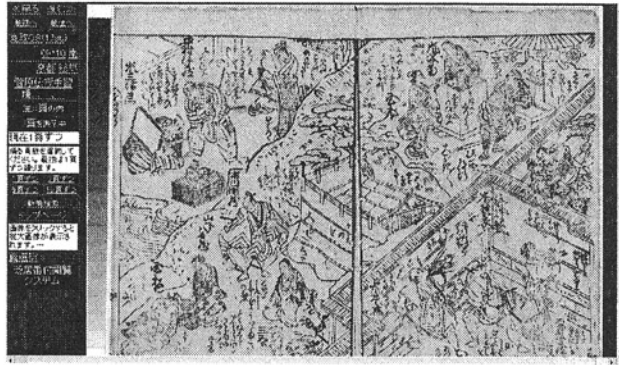
芝居番付閲覧システムVer.1

年月	劇場	役名	役者	備考
1792	大田	大田	大田	大田
1793	大田	大田	大田	大田
1794	大田	大田	大田	大田
1795	大田	大田	大田	大田
1796	大田	大田	大田	大田
1797	大田	大田	大田	大田
1798	大田	大田	大田	大田
1799	大田	大田	大田	大田
1800	大田	大田	大田	大田

番付は、書物のように見えて一般の出版物と性格を異にするところが多い。例えば、検索のための最重要キーは、年月と劇場であるが、一般的には、タイトルと考えるが、人気演目は何度も再演される

から、検索のためのキーとしては、失格である。しかし、それを説明するのは意外と難しい。わかりやすいインターフェイス開発もの構築は一つの課題である。

fig.5 画像表示画面



このデータベースを使うことで、むしろ、原本が手元にある環境よりも、研究効率があがると思われる。

・正本アーカイブ（台本・音曲正本）

芝居上演時に使われる台本や詞章・楽譜に当る。正本アーカイブは、比較的進んでいないが、歌舞伎舞踊研究には必須の資料であり、来年度国立音楽大学との共同研究がスタートすることになっており、世界最大の正本コレクションのアーカイブが 2005 年度からスタートすることになっている。これが番付、役者絵その他のアーカイブと連動して機能する時代がすぐそこに来ていることを予告しておく。

・役者評判記アーカイブ

現代の劇評に当たる資料であり、幕末まで途絶えることなく続いた。演劇雑誌の前身とみることができる。

これらは、研究上の基本資料であり、歌舞伎台本のアーカイブを除いて、何らかの形でデジタルアーカイブが進行している。

本プロジェクトでは、この内、役者絵のアーカイブに力を入れており、COE「書物と絵画」プロジェクトの浮世絵アーカイブと共同し、世界最大の役者絵情報のデータベース化に成功し、現在まで作品数 9 万件に及ぶ。

また、歌舞伎番付に関しては、日本大学総合情報センター所蔵番付のデジタル化と書誌目録付与を歌

舞伎年表研究会と共同して行ない、DVD パッケージを制作した。しかし、パッケージ化してしまうと、価格がきわめて高価となり、WEB 上での展開が長期に亘って妨げられることになる。学術的な資料公開に関しては、今後はできるだけ WEB 展開を図るべきであろう。並行して進めていたアーカイブに、大阪女子大学図書館に収蔵された土田衛氏旧蔵椿亭文庫の芝居番付がある。これは、個人コレクションとしては圧倒的な量を誇り、DVD と椿亭文庫を併せると、江戸時代の歌舞伎の興行の80%の興行記録を網羅することになる。

本プロジェクトでは、その他に「歌舞伎年代記」という、江戸歌舞伎の年表・歴史書のアーカイブも行なっている。

#### 4. 作品内容アーカイブ

鑑賞のためには、歌舞伎作品をよりわかりやすく理解するための道具が幾つか必要となってくるが、本プロジェクトでは、まだこの点には力を入れていない。特に、作品本文のデジタルアーカイブについては、大量所蔵者である演劇博物館が積極的な公開に至っておらず、残念ではあるが、それい以上に写本で伝わっていることによるデジタルテキスト化の困難が上げられるだろう。そのため、「歌舞伎台帳集成」(勉誠社)のような事業がつい最近まで続いていた。それぞれ、書籍として販売されているため、デジタルテキストとして、研究に供されるまでには、しばらく先のこととなる。

そのため、作品解説アーカイブのような、一般向けの解説を集積するプロジェクトも必要と思われる。現状でも、歌舞伎愛好者によって、さまざまな WEB サイトが運営されており、その中で粗筋や解説が読める。

さらには、作品内容アーカイブのアーカイブが必要で、例えば登場人物データベースのようなツールは、現在土田衛氏によって、本プロジェクトに寄託され、公開しているが、このような大きなデータベースを継続して成長させる必要がある。

#### 5. 歌舞伎映像ソフトの流通状況

現状では、歌舞伎は舞台上で鑑賞するのが主流であるが、テレビ放映がNHKだけでなく、CS放送である伝統文化放送で毎日のように流れており、比較的鑑賞し易い環境が生まれつつある。しかし、教育利用については、著作権の問題により、放送のダビングを保存することができないため、契約者が家庭内で鑑賞するにとどまる。一方、DVDソフトが、ようやく継続して販売されるようになり、これらの蓄積により映像を使った教育的な環境が用意できるようになりつつある。

また国立劇場の文化デジタルライブラリでは、教育機関にのみパスワードを発行して、ネット上での映像鑑賞を可能としている。

以上により教育の場で映像を使った自習や予習を実現できるようになってきた。映像による学習にあたっては、一つの鑑賞方法として、疑問点や興味が生れたところでポーズをとり、他の参考情報を使いながらより深い理解のもと、鑑賞を継続するという方法もある。これは、いわゆる古典演劇であるから考えられる鑑賞方法で、単なる娯楽番組に適応する方法ではないことは、言うまでもない。

この疑問や興味が素早く解消するための道具として、歌舞伎アーカイブが機能していくと考えられる。

#### 6. 歌舞伎総合データベースのエントランス

以上に述べたデータベースは、相互に有機的に結びつけて稼働する。例えば、本プロジェクトが用意している「歌舞伎興行年表データベース」は、これらのアーカイブのエントランスデータベースとして働く。本データベースは年表であり、時間軸を主軸とした情報整理となっている。具体的な利用状況を例示する。

ある鑑賞者が、松竹株式会社が販売している DVD ソフト「菅原伝授手習鑑」を見ていたとする。歌舞

伎作品の中の代表的名作の一つであり、何時しかその映像に集中していたが、場面の合間にふと一息し、この作品は歌舞伎ではいつ初演されて、どれぐらいの人氣があったものなのかを調べたくなる。そこで、DVD を止め、同じパソコンから、歌舞伎興行年表にアクセスし、「菅原」と入れて検索する。すると、「菅原伝授手習鑑」の上演一覧が即座に表示される。

また、人物名による整理として、「歌舞伎人物データベース」を用意している。上記「菅原」DVD の主人公である松王丸を片岡仁左衛門が演じている。この片岡仁左衛門は、15 代目であるが、ビデオが制作

fig.6 1 回目検索結果

された段階では、役者の片岡孝夫であった。「歌舞伎人物データベース」で孝夫を調べると、1 名ヒットする。この画面から改名ボタンを押すと、次のような一覧が開く。

fig.7 改名状況表示結果

この結果、初舞台以来本名で舞台を勤めてきた、片岡孝夫は、平成 10 年に片岡仁左衛門を襲名して現在に至ることがわかる。

また、それならば、この 15 代を数える片岡仁左衛門とはどのような歴史を持つ名前なのかを調べるために、片岡仁左衛門をクリックすると、初代から 15 五代目までの片岡仁左衛門代々の名乗期間が一覧となる。

そのなかでも、8 代目の仁左衛門は、幕末期に江戸上方の双方で活躍した役者であるが、解説ボタンをクリックすると、この役者の活動解説が詳しく表示される。

fig.8 片岡仁左衛門代々一覧

fig.9 8 代目片岡仁左衛門解説

役者・芸能人データベース

8代目 片岡 仁左衛門(かたおか にさえもん)の説明  
(代表名:8代目 片岡 仁左衛門)

また、この画面から錦絵ボタンをクリックすると、8 代目仁左衛門が描かれた錦絵が浮世絵検索システムと連動して立上り、一覧で表示される。

fig.10 8 代目片岡仁左衛門 役者絵一覧

浮世絵検索システム 検索結果(サムネイルのみ)

このように、ふと疑問が浮かんだ時に、即座に情報検索ができて、しかも他のデータベースと連動して、次々と新しい情報を仕入れていくことができるのである。

これらの情報には、地理的情報が自ずから付与されてきている。つまり、演劇表現は常に舞台において行なわれるため、データベース化した場合、いつ、どこで、だれが、どのようなことを演じたかという基本的な設定項目があり、「どこで」という地理情報がほとんど全てのデータに含まれる。また、「いつ」という時間情報も必須項目であり、京都アート・エ

ンタテインメントにおける「バーチャル・タイム・スペース」に直結するアーカイブである点が特徴である。

## 7. 京都歌舞伎興行情報の再構築

このような歌舞伎興行のデータベースの内、京都に関しては、デジタル化の動きは他の地域に比べて遅く、紙媒体としても堂本寒星による歴史記述 [2] と「近代歌舞伎年表 京都篇」 [3] があるのみである。したがって、地理的、時間的、あるいは内容的なフィルターによって分析し直すというような結果は瞬時には得られない。

本プロジェクトでは、今後特にここを重点的にデータベース化しながら、しかも無形文化財としての特徴を踏まえつつ、研究基盤の形成を行なっていく予定である。

[1] 舞踏のデジタルアーカイブ (八村広三郎)、文化財の3次元物体モデリングとビジュアライゼーション (田中弘美)、芸能音楽の記録と再現のための高度アーカイブシステムの開発 (山下洋一)、SMIL プロジェクト (オープン・リサーチ・センタープロジェクト) など。

[2] 「京都の歌舞伎」(「南座」の市販本)

[3] 国立劇場近代歌舞伎年表編纂室編 全10巻。

[4] なお、上記に触れたデータベースには、現状で、公開されているものもあるが、所有者との契約で公開していないものもある。いずれも完成した段階で、資料所有者の運営するWEBサイトから公開されることになる。公開されたデジタル資料は、公開サイトにリンクする手法で、ポータルサイトとしての役割を本プロジェクトの統合データベースが果たす。

あた、このリンクの連環により所有者ごとに公開されたデジタルアーカイブがより一層の価値を増すことになるのである。

なお、公開データベースのURLは以下の通り。

<http://www.arc.ritsumei.ac.jp/dbroot/default.htm>